

「社会福祉基礎」の校外授業を行いました

～サンビレッジ国際医療福祉専門学校（池田町）にて～

4月16日（木）5・6限、今年度新設した3年生の選択科目『社会福祉基礎』の校外授業をサンビレッジ国際医療福祉専門学校のご協力のもと、同校にて行いました。授業内容は『障がい者体験』です。3年2組の科目選択者28名が出席しました。その様子を紹介します。

開講式の挨拶で、小林月子学校長は次のように話されました。

「池田高校の『社会福祉基礎』2回目の授業ですね。今日は『福祉』の現場体験をします。体験を通して『障がい』について学びます。皆さんは『福祉』にどんなイメージを持っていますか。50年前、日本のお年寄りの割合は20人に1人、今は4人に1人、10年後は3割になります。そのような時代を迎え、私たちは高齢者の人間の尊厳を大切にしなければなりません。

福祉・介護・リハビリ、医療分野で働く人は、専門的知識と技術とともに、相手の人の心や痛みが分かる感性が必要であり、お年寄りや障がいを持つ人を自分自身の姿として捉えられる人、その人らしい人生を送れるように専門的にサポートできる人でなければなりません。認知症高齢者を在宅と地域で支える地域包括ケアシステムがあります。そこでは、在宅や地域でその人の人間らしい生き方に寄り添い、他の専門職と手を携える専門家を必要としています。

『福祉』は親になること、人にしてあげること、知らなかったことがわかる素晴らしい世界です。十分に授業を楽しんでください。」



【『社会福祉基礎』校外授業開講式】

サンビレッジ国際医療福祉専門学校長小林先生よりご挨拶、「本校で現場体験を楽しんでください。」



【体験活動①】

体育館に移動、ペアになり、介護福祉学科の小泉裕子先生より体験することの意義と今日の演習の説明を受けます。

「相手の気持ちを考えてみてください。特に障がいのある方の気持ちを考えましょう。今日は視覚障がいを体験してみます。体験することで視覚障がいがある方の気持ちが少し分かります。あとは想像力を働かせてみましょう。」

- ・ 2人1組になり、体験の順番を決めます。
- ・ アイマスクをして、体育館の端から端まで一人で歩きます。
- ・ ペアの方は、声は掛けずに見守ります。どうしても危険な場合だけ声を掛けます。
- ・ 端まで行ったら役割を交替し、逆向きに端から端まで一人で歩きます。

《みんなとても不安で、なかなか前に進めません》





【体験活動②】

同じペアで、アイマスクをつけ白杖を使い、体育館の端から端まで歩きます。2分ずつで交代します。

《白杖があると障害物を知ることができ、ずいぶん安心感が違うようです》



【体験活動③】

同じペアで、アイマスクをつけ白杖を使い、ペアの人がガイドをしながら歩きます。この時はガイドの仕方については特に説明はされません。体育館を出て、玄関やサロン、学生ホールなどを自由に歩きます。5分ずつで交代します。



【体験活動④】

体育館に戻り、小泉先生からガイドの仕方について、生徒の一人をモデルにしたデモンストレーションを見ながら説明してもらいます。

- ・ガイドは右手を伸ばし、半分重なるように、視覚障がい者の斜め前に立ちます。そして自分の右ひじを障がい者に持ってもらいます。
- ・角を曲がる時は直角に曲がります。
- ・物には直角に対面します。
- ・椅子に座らせる時は、椅子に触らせて、背もたれの有無を確認させてから座ってもらいます。



先生の説明の後で、再度、デモンストレーションに従ってガイドを行い、体育館から学生ホールまで歩きます。途中3分ずつで交代します。

《信頼できる友人のガイドで、段差や障害物を避け、上手に誘導ができました》





【体験の振り返りと感想発表】

アイマスクをして歩いた、3つの体験について、感想を記入します。その後で、一人ひとり感想を発表します。

体験①：何もしないで歩く。

体験②：白杖を持ち、ガイドに指示してもらいながら歩く。

体験③：白杖を持ち、ガイドのひじを持って誘導してもらいながら歩く。



【まとめの活動】

サンブレッジの先生方よりご講評をいただきました。

「相手の立場になることを体験してもらいました。ガイド役は相手の人にどう伝えるか難しいと感じたと思います。そのためにガイドの訓練や研修があります。視覚障がいのある方にとって階段や車・人がいる屋外はもっと大変です。

今日は不自由さを感じ、普通であることの幸せを分かってもらえました。楽しく経験してもらえてよかったです。ご家庭でも、たとえば片手だけで生活してみるなどの体験をしてみてください。」

授業後の振り返り

➤ 生徒の感想

・いつも視覚に頼っている分、不安が大きく、周囲の物も周りの歩行者も見えないので、とても怖いと思った。白杖を使って歩いてみても、怖くてまともには歩けないので、パートナーの存在がとても大切だと思った。

・ガイドする側は、自分に命を預けてもらっているという気持ちを忘れず、指示の出し方を間違えることのないよう慎重に行わなければならないことを学んだ。

➤ まとめ

視覚障がい体験を通して、障がいがある方々の不安や恐怖、不自由さを体験することができました。私たちには、障がいについて知らないことが多く、知らないことが偏見を生むことがあります。様々な体験を通して、まずその障がいを知ること、理解することが大切です。そして、相手の立場に立って考えることでその方たちとの関わり方が見えてきます。今後は、困っている人に手を差し伸べたいという気持ちだけではなく、どのように手を差し伸べたらいいのかを考えて行動できる人になってほしいと思います。

～本校では、ESDを推進し、一人一人の夢を実現するための学びを進めています～